

首里方言の命令表現にかかわるモダリティ

崎原, 正志

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

89

(発行年 / Year)

2017-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014496>

首里方言の命令表現にかかわるモダリティ¹

崎原正志

要旨

本稿は、首里方言の行為要求文²のうち、命令文に焦点をあてて、命令文のモダリティについて詳しく論じることを目的とする。首里方言の命令形には、基本的³な形式として*ci*形式と*ce*:形式のふたつがある⁴。現代首里方言では、*ce*:形式が命令文を形づくる最も基本的な形として位置づけられる。*ci*形式は、そのままの形でも用いられるが、多くは、終助詞*jo*:を後接させた*cijo*:という形で用いられ、この*cijo*:形式は幾分聞き手に配慮した言い方となる。*ce*:、*ci*、*cijo*:のみつつの形式の他に、*wa*形式がある。*wa*形式は、主に命令形が*ci*や*ce*:という形であらわれないいくつかの特定の動詞（主に*ŋcu:n*「来る」）の命令形として用いられる。

本稿では、*ce*:形式と*cijo*:形式を中心に、これらの形式を含む文が表すモダリティ（文の機能）について明らかにしたことを述べる。また、これらの形式を含む文が表すモダリティについて明らかにするためには、話し手と聞き手の関係、動作の実行によってもたらされる利益性、動作への意向や希望、どのような動詞が使われているか（語彙的な意味・意志性・抽象性）、動作主体は誰かなど、様々な観点から分析する必要があることを示す。

1. はじめに

〈命令〉と場面状況的なニュアンス・意味あい⁵

次にみるように、*ce*:形式、*cijo*:形式、*ci*形式、*wa*形式を述語に含む文は、ニュアンスに程度差はあるが、いずれも命令文を形づくることができる。尚、用例は簡略的な音声表記（IPA：国際音声記号）で記す⁶。

¹ 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金「琉球語首里方言のモダリティー実行・叙述・疑問のモダリティー」の助成を受けている。

² 本稿では、行為要求文という用語を、動作主体が二人称である命令文と、動作主体が聞き手を含んだ一人称である勧誘文というふたつの文の総称として用いる。

³ ここでいう「基本的」とは、命令の形式が命令文を形づくるという形態論上の理由だけでなく、使用頻度が高いという理由からも判断される。

⁴ *ci*形式や*ce*:形式などというのは、最も基本的なふたつの命令形式を動詞*sun*（する）で代表したものであり、抽象的・名付けのなものである。例えば、*ʔikun*（行く）なら、*ci*形式が*ʔiki*、*ce*:形式が*ʔike*:となるように。

⁵ 〈〉は、形式や文の具体的な使用場面における文法的な意味あいや機能を一語あるいは数語で用語化したものを明示するために用いる。

⁶ 音環境によって多少変化するが、基本的に、シャ行音を*c*（無声歯茎硬口蓋摩擦音）で、ラ行音を*n*の前では*ɺ*（そり舌側面接音）、それ以外では*r*（歯茎はじき音）で書き表す。尚、音声は筆者の聴覚的な判断によるもので、音響学的な調査は行っていない。詳細は今後の課題である。

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1) ɸe:ku ʔirabe:. | 早く <u>選</u> べ。 |
| 2) duɕe: ʔju: ʔirabijo:. | 友達は よく <u>選</u> べよ。 |
| 3) ɸe:ku ʔirabi. | 早く <u>選</u> べ。 |
| 4) ɸu:saru munjara ʔirabiwa. | 欲しい ものから <u>選</u> べ。 |

これらの形式（を含む文）がどのように使われているのか、それぞれがどのようなモダリティを実現しているのかについて分析したところ、命令文にも様々なヴァリエーションがあり、また〈命令〉というモダリティだけでなく、〈勧め〉や〈許可〉といった場面状況的なニュアンス・意味あいを含んだモダリティをも表せることがわかった。結論を先に述べると、以下の表のようにまとめられる。

表1 ce:形式とcijo:形式の〈命令〉のモダリティ

強制	利益性	〈命令〉としての機能	形式	付加された機能	形式
強 ↑ ↓ 弱	聞き手不利益あり	〈強制〉	ce:, ci (古)	+〈罵倒〉	ci k ^w e:wa
		〈指示1〉	ce:, ci (古)	+〈同意=念押し〉	ce:ja:
	〈要求〉 ----- 聞き手不利益 ニューtral	〈違反矯正〉	厳しく ce: やさしく cijo:	-	-
		〈指示2〉	cijo:	+〈同意=念押し〉	cijo:ja:
		〈丁寧な命令・促し〉	cimiso:re: cimiso:rjo: cimice:bire: cimice:biri cimice:birjo:	-	-

表1の用語の説明：

強制（力）：話し手から聞き手へ伝えられる「動作の実行に対する強制的な態度の度合い」のことを指す⁷。

利益性：動作の実行の実現により生じる利益あるいは不利益のことを指す。命令文（動作の実行を要求する文）は、話し手が望む動作を聞き手に働きかけて仕向ける文なので、原則、話し手側にいつも利益がある。しかしながら、命令形が用いられていたとしても常に命令文になるわけではない。利益の有無および聞き手にも利益あるい

⁷ 拘束力とも呼ばれ、酒井（2012）では「拘束力が強い場合は、聞き手に行為の実行についての決定権はなく、弱い場合は聞き手に行為の実行権がある」と説明がなされている（p.20）。

は不利益がおよぶかどうかによって、文の意味あい・機能が変化する。

機能：具体的な使用場面におけるプラグマティカルな意味あい・機能のことを指す。命令文では、〈命令〉という土台的な意味（あるいはセマンティカルな意味）に、〈要求〉や〈勧め〉といった意味あいが付け加わる。〈要求〉の文は、強制力と利益性の観点からさらに〈強制〉や〈指示〉などに細分化される。

付加された機能：命令形式の後ろにさらに終助詞やその他の文法化した諸形式が付加されて、それと同時に文に付加される別の意味あいや機能のこと。例えば、〈命令－強制〉の文にk^we:waという形式が付加されて、〈罵倒〉という意味あい・機能が付け加わり、〈命令－強制－罵倒〉となる等。

このような場面状況的なニュアンス・意味あいは、下記に示す通り、発話にかかわる場面状況的な要素・条件のあり方によって、変化することも明らかになった。

①話し手と聞き手との関係

- ・話し手は聞き手より目上か目下か
- ・話し手と聞き手の性別
- ・話し手と聞き手が知り合いかどうか（どのくらい親しいか）
- ・話し手と聞き手の制度的階級（貴族・士族・平民）
- ・話し手と聞き手の社会的階級（職業など）

②動作の実行によってもたらされる利益性

- ・話し手に利益あるいは不利益がある行為か
- ・聞き手に利益あるいは不利益がある行為か
- ・利益性はニュートラル

③動作への意向や希望

- ・聞き手がさきに行為の実行に対する意志・意向・希望を示しているかどうか

④どのような動詞が使われているか

- ・動詞の語彙的な意味
- ・動詞の意志性・無意志性
- ・動詞の具体性・抽象性

⑤動作主体は誰か

- ・聞き手（二人称）
- ・話し手も含む（一・二人称）
- ・不特定多数
- ・無情物

⑥働きかけの効力（行為の実行はいつ行われるべきか）

- ・発話直後、今
- ・必ずしも発話直後でなくてもよい。いつ実行すべきかが文脈の中で示されている。

⑦場面や発話状況

- ・行為の実行が行われる前か最中かその後か
- ・話し手の望まない聞き手による違反・逸脱行為

⑧時代背景や場面設定

- ・現代社会か、琉球王朝時代か、芝居か、など

本稿では、このような様々な観点から、首里方言が用いられている会話テキスト、芝居の脚本、民話の語りなどにみられる*ce:*、*ci*、*cijo:*、*wa*形式を述語に含む文を分析の対象とし、これらの文のモダリティについて明らかにしたことを詳細に記述する。尚、用例が不足していて、モダリティ分析に差し支えがないと判断される場合に限って、首里方言の近隣方言（那覇方言・久米方言・泊方言）や、首里・那覇方言をベースとした芝居言葉などの用例も用いる。

2. 〈命令〉

本稿でいう〈命令〉とは、「話し手が聞き手に働きかけて、話し手の観点から望ましく思う動作の実行を、聞き手に求める」ことを指す⁸。だれにどのように働きかけて、どのくらい求めるのか、場面や文脈によって、強制的なものから、非強制的なものまで命令文といっても様々である。以下では、まず*ce:*形式が用いられる、強制的かつ聞き手の利益にならない典型的な命令文からみていき、その次に、*ci*形式の命令文について述べたあと、*cijo:*形式の命令文およびその他の命令文のヴァリエーション、最後に〈命令〉から派生した〈勧め〉や〈許可〉の文について述べる。

2.1 *ce:*形式の文による〈命令〉

*ce:*形式は、聞き手の意向を無視した、一方的で、聞き手利益のない〈強制的な命令〉の文で用いられることが多い。例えば、次の用例の話し手Aの発言は、聞き手に対して行為の実行の決定権を全く与えない強制力の非常に強い命令文である。行為の実行は聞き手にとって利益のない、むしろ不利益なものである。ここでいう不利益には、聞き手へ不快感を与えるかどうかも含められている。聞き手にとって不利益な命令文は、同時に不快感も与える。

⁸ 本稿でのこの規定は、村上（1993）の命令文のモダリティの規定に従ったものである（p.68）。

5) [親Aと子Bの会話。子BはAに勘当される]

A: ?ja: t̄cira: 'n:dzibuçikun ne:n. お前(の) 顔は 見たくも ない。
nama çigu ?ndziti ?ike:.
B: ?u: ?ndziti ?it̄cabi:sa. 今 すぐ 出て 行け。
ええ。出て 行きますよ。《調査》

6) [乱暴な男Aに、女Bが優しく接してくれたらうれしいのにとこぼすが]

A: ?ja:ga ?wi:rikisatin お前が 嬉しくても
'wanne: ?wi:rikiko:ne:n. 俺は 嬉しくない。
kuφamuni:ja 'wan²m̄maridu 'jakutu 口が荒いのは 生まれつき だから
kune:to:ke: 我慢しておけ。
B: ?ançe: na: 'jutasai:sa. それでは もう 結構です。《実践：45》

聞き手利益の観点からは、聞き手に不利益（不快感）を被らせるものと、必ずしもそうではないものに分けられる。次の用例も、話し手が聞き手に対して行為の実行を要求している命令文であるが、聞き手利益の有無に関しては、上の用例ほどははっきりしていないし、聞き手へ不利益・不快感を与えるかどうかに関してはニュートラルである。単に、聞き手に行為の実行を〈要求〉し、〈指示〉を与えている。このように、聞き手の利益・不利益よりも、話し手側に利益があるか、話し手が行為の実行を強く望んでいるような場合、〈指示〉的な命令文となる。また、「立て・捕まえろ・読め」のような具体的な動作を表す動詞や、「急げ・手伝いしろ・挨拶しろ」など一連の具体動作をまとめた動詞を述語におく。行為の実行は即時行われるのが普通である。

7) mi:nu kensa hadzimi:ndo: 目の 検査 始めるぞ。
makate: to: kumaŋkai tate: マカテー さあ ここに 立て。《実践：48》

8) [女Bが重い物を持っているので、手伝いを申し出る男A。Cは現場監督の男]

A: ?e: 'inagu. t̄cibi kat̄çimitin çimmi. おい 女。端(を) 捕まえても よいか。
B: ?u: kat̄çimiti k^wimiso:re:.
C: ?ja:n kat̄çimire: はい。捕まえて 下さい。
D: 'wanne: gute:nu 'jo:sanu naibiransa: お前も 捕まえろ。
私は 力が 弱いので できませんよ。

《実践：38》

9) A: kunu maŋga: ?umusando: この 漫画 面白いよ。
B: ?ançe: kumaŋkai karaci. じゃあ こっちに 貸せ。

(2.6 「wa形式」も参照)。

- 13) *ci*guni 'jutanu ?abasa:mme: ?unt^{ci}ike:ci. すぐに ユタの アバサー婆さん(を) お連れしろ。《猿》
- 14) ^{ci}t^{ci}:ja ?uri ?ima^{ci}imisundi ?i^{ci}t^{ci} t^{ci}an. 今日(は) それ(を) 戒めると 言って 来た。
masanu: kuma^{ci}akai 'jubi. マサンルー 真三郎(を) ここに 呼べ。《芝居:542》
- 15) ?ance: *ci*guni ka:mi:tu ϕ uka ?e:^{ci}zi^{ci}ci sa:ru: so:ti ku:n^{ci}t^{ci} t^{ci}ike: 'ja^{ci}ci. では すぐに カーミーと 他(を) 呼んで 猿(を) 連れて 来いと 遣いに やれ。
《猿》
- 16) ?itta:n t^{ci}i^{ci}caru tu:i ?o:nu b'o:t^{ci}ce: お前達も 聞いた 通り 王の 病気は
sa:ru:nu nama^{ci}dzimu^{ci}cidu no:juru. 猿の 生肝でしか 直らない。
'jati ?uri tuti ku. だから それ(を) 取って 来い。《猿》
- 17) A:kunu ma^{ci}ga: ?umusando:. この 漫画 面白いよ。
B: ?ance: kuma^{ci}akai kara^{ci}ci. じゃあ こっちに 貸せ。
A: na:da 'jude:uran. ?i^{ci}t^{ci}uta: mati. まだ 読んでない。ちょっと 待て。
《入門:18》
- 18) 'wakasaininu nand^{ci}ze: ko:tin cici. 若い時の 難儀は 買っても しろ。《諺》
- 19) ?ja:garu kat^{ci}imirindi ?itae:sani. お前が 捕まえろと 言ったじゃないか。
《実践:38》
- 20) 'wa:ga ?awati^{ci}rindi ?i:ne: ?u ϕ e: ?awati^{ci}re:. 俺が 急げと 言ったら 少しは 急げ。
《実践:29》

現代首里方言では、*ci*形式は時代の変化とともに*ce*:形式に取って代われ、実際の会話において強制力のある命令文としては、*ci*形式よりも*ce*:形式を含んだ文の方がもっぱら用いられる。また、次の終助詞*jo*:が付いた*cijo*:形式も多用される。

2.3 *cijo*:形式の文のよる 〈命令〉

〈命令〉の文において*ce*:形式の次によく用いられる形式は、*ci*形式に終助詞*jo*:が付いた*cijo*:形式である。終助詞*jo*:は命令文につくと、聞き手への〈強制〉という意味あいを弱め、直接的な命令を避けさせるはたらきがある。したがって、*ce*:形式に比べて、聞き手を配慮したやわらかい命令表現になる¹⁰。

¹⁰ 終助詞*jo*:は、命令文と叙述文につく場合とで文のモダリティがだいぶ異なる。崎原 (2015) やかりまた (2016) も参照されたい。

次のcijo:形式を伴った〈違反矯正〉の例と、その次のce:形式を伴った〈違反矯正〉の例を比べてほしい。これらふたつの文を比べると、cijo:形式が聞き手を配慮したいいい方で、ce:形式が強制力の強い命令文として用いられていることがはっきりする。これらふたつの用例は同じ登場人物・同じ場面で用いられていて、前者のあとに後者の発話が展開される。前者で一度、cijo:の文を用いて諭すように注意したのにも関わらず、注意を守らなかったため、後者の発話ではce:形式を用いた強制的な命令文となっている。

24) [横暴な試験官と受験者のやり取り]

- A: 'wan̩ga ʔiçi t̩çikari:mi. t̩çikari:ra: 私 が 言う事 聞こえるか。聞こえるなら
ʔire:φid̩z̩in sawadu ʔjaru. 返事ぐらい するべきだろう。
- B: nu:ga nu:n̩t̩çisai. なぜですか。
- A: ʔai kuniça:ja subakara ʔattaʔabi:ei: おい この野郎 横から 急に話かけ
kʷati çit̩sumon ʔjara: ti: ʔagiri:jo:. やがって 質問 なら 手(を) 挙げろよな。
- B: ʔunige:sabira. ti: ʔagito:ibi:ndo:. お願いします。手(を) 挙げていますよ。

《実践：46》

25) [Aが手を挙げずに質問しようとする]

- A: ʔe:sai. あのう。
- B: ʔane kuniça: mata ʔattamuni: çikʷati おい こいつめ。また 急に 話やがって
ti: ʔagitikara ʔire:.. 手(を) 挙げてから 言え！
- A: kissakara ti: ʔagito:ibi:çiga ʔund̩zo: さっきから 手(を) 挙げてますが 貴方は
ʔanu ʔumani:ŋkai mu̩t̩çikʷa:tti 'wan̩ga あの 姉さんに 夢中で 私が
ti: ʔagitin 'n:d̩z̩in sabiramunnu. 手(を) 挙げても 見も しませんですもの。

《実践：47》

次にみるように、話し手が自分の家に聞き手を招くような〈招待〉の文でもcijo:形式が用いられやすい。〈招待〉の文は、行為の実行を勧めているようにも感じられるが、聞き手にとって利益があるかどうかというよりも、話し手がそれを望んでいる要素が強く、命令文や勧誘文といった聞き手に働きかける行為要求文に近い。聞き手利益のある〈勧め〉の文とはとりあえず区別し、命令文の下位に位置づけておく。

26) [道でばったり会うAとB。用事を済ませたらAの所に寄るようBに言う]

- A: muduine: ʔut̩çi t̩çei ʔjukuti ʔut̩cande: 戻ったら うち 来て 休んで お茶でも
nudi ʔikijo:. 飲んで 行って。
- B: ʔu: niφe:de:biru. はい ありがとうございます。《全国：278-279》

- 27) A: nage: nunt̃ci ʔugami:gan 長いこと お顔(を) 拝見しにも
 ʔju:ci:riju:sabiran ʔusuri ʔitt̃co:ibi:n. 来れませんか 申し訳 ございません。
 B: ʔn: 'nna ʔitt̃cunasa sukutuja:. ああ みんな 忙しい からな。
 ʔiφina: ku:jo:. たまには 来なさい。
 A: ʔu: cidu:gaφu:. はい。ありがとうございます。

《方談10 : 255-256》

次の用例は、標準日本語における上昇イントネーションを伴った「今度は～しろよ↑」のような命令文で、出来事が終わって後に、次回同じような場面があれば、二度と同じあやまちはくり返さないように釘をさすという場合の用例である。このような時にも、ふつう、*cijo:*形式が用いられる。調査協力者の内省によれば、この場合、*ce:*形式は非常に使いづらい。

- 28) [聞き手が公演中に私語をしていた。その時は注意できなかったので、公演後に呼び出して、今後、似たような場面のときはちゃんと話を聞くように注意する]
 namakara: ʔju: t̃ci:kijo:. 今度からは よく 聞けよ↑ 《調査》

2.4 *ce:ja:*、*cijo:ja:*形式

*ce:*形式や*cijo:*形式は、さらに終助詞*ja:*を後接させることができ、*ce:ja:*や*cijo:ja:*となる¹³。*ce:*や*cijo:*の文の意味あいには終助詞*ja:*の意味あいがさらに付加されて、〈念押し〉といった意味あいを表すことができる。*ce:ja:*や*cijo:ja:*の文のモダリティを理解するためには、*ce:*と*cijo:*の文が表せる全ての意味あいに関する理解が必要なため、本稿の一番最後に述べることにする（したがって、詳細は論末の8.「*ce:ja:*、*cijo:ja:*の文のモダリティ」を参照されたい）。

2.5 *mice:n*を伴った*ce:*、*cijo:*、*ci*形式の〈命令〉

kʷi:n（くれる）や*turasun*（やる）などの授受補助動詞のつかない、述語に尊敬を表す*mice:n*を伴った命令文は、聞き手との関係のなかで聞き手を敬う場面で用いられる。見つかった用例のうち、聞き手が目上であったり、階級が上位であったりするなどの社会的・文化的な制限が加わるケースがほとんどであるが、実生活では、親しさや個人の性格などより個人的な事情が関わる場合もある（3.4も参照）。

¹³ 命令の*ci*形式に直接*ja:*が後接することはない。また、*ce:ja:*形式は引用節で用いられる時、一人称主語をとって話し手の〈決意〉などを表すが、今回はこれについては触れない。
 例) na: t̃cut̃cibai ce:ja:ndi ʔumuibi:n. もう 一頑張り しようかと 思います。

聞き手を敬う文脈や場面上、強制力は弱まり、ほとんど〈要求〉や〈強制〉の意味あい
はなくなるか、弱くなる。多くの場合、〈丁寧な行為の実行の促し〉を表すが、〈要求〉を
表したとしても、聞き手に配慮しながらの〈丁寧な行為の実行の要求〉を表す。mice:nを伴っ
た命令文にも、ce:形式、cijo:形式、ci形式がある。それぞれ、miso:re:、miso:rijo:、miso:ri
となる。さらに、丁寧さを表す接辞-ibi:nがついたmice:bire:、mice:birijo:、mice:biriという
形もある。

2.5.1 ꝑimiso:re:形式の〈命令〉

次の用例は、王様が病にかかったので、ユタであるAに王様の臣下であるBが王様の健
康祈願をお願いしていて、BがAに急ぐようにせかしている場面である。AとBの年齢に関
しては、原文からはあきらかではないが、専門的な知識をもったユタ（民間の祝女）であ
るAに対して、王様の臣下であるBはcimiso:re:を伴った命令文を用いている。ここでは、
王様の容体がよくないため、急いでほしいというきもちから聞き手に急ぐよう促している。

29) [話し手B: 王様の臣下 → 聞き手A: 王様の病を診るようお願いされたユタ]

A: ꝑa:ja ꝑansuka ꝑi:ŋci ꝑukatŋci nu:ga	お前は そんなに 息(を) 切らして どう した?
gudzira:ja ma:cigata:du 'jarui.	グジラ王は 死にそう なのかい。
B: ꝑane: ꝑaibiransa. ꝑisudzimiso:re:.	そうでは ありませんよ。お急ぎなさい。
A: ŋcu:ja mo:kirari:satai.	(独り言で) 今日 儲けそうだな。
B: ꝑe:tai ꝑundzo: ta:tu munu ꝑiŋco:gatai.	あら 貴方は 誰と 話してるの。
<u>ꝑawatimiso:re:</u> .	<u>お急ぎなさい。</u> 《猿》 ¹⁴

次の用例は、熟年夫婦の会話である。妻Aが夫Bに対してcimiso:re:を伴った命令文を用
いている。昔の首里の家庭内での地位は妻（女性）よりも、夫（男性）の方が高かったよ
うである¹⁵。したがって、妻から夫へ行為の実行の要求、あるいは行為の実行を促すときは、
敬語を使用していた。

¹⁴ ꝑisudzun（急ぐ）とꝑawati:n（慌てる）は両方とも意志動詞として命令形をとり、命令文で用いられる。
ꝑawati:re:（慌てる/急げ）のようにꝑawati:nの方が口語ではよく用いられる。

¹⁵ 調査協力者によれば、首里では、妻が夫より年上であっても、敬語を用いたという。また、士族・平
民など階級に関係なく、そうであった。

30) [話し手B: 妻 → 聞き手A: 夫]

A: ʔariari. 'watta: ʔaja:jo: 'wadzinnajo:.	あらあら 俺の 母さんたら 怒るなよ。
B: 'wadzi:n sabiran 'warain sabiransa.	怒りも しないし 笑いも しませんよ。
ʔe:ku na: ʔit̪ci t̪cikacimiso:re:.	早く もう 言って <u>聞かせてくださいな</u> 。
A: ʔaja: 'wan̪ga kissakara kuma	母さん 私が さっきから ここ(を)
kat̪cimiso:ci 'n:t̪co:mi.	捕まえてるの(を) 見ているか。《実践：30》

次の用例では、道で遭遇した女Aと男Bの会話である。一貫として女は男に対して敬語を使用し、男は女にぞんざいな物言いをしている。話の冒頭で、男は女をʔumani: (姐さん)と呼び、女は男をʔat̪ci:tai (おにいさん)と呼んでいるが、文脈からは具体的な年齢ははっきりしない¹⁶。ただし、男は無職だが首里の士族の家柄だと明かしていて、女の職業は商人だという。社会的に男性の方が上位だということと、家柄や職業的な要因がかかわっているのだと考えられる。ここでは、AはBに配慮しながらも、行為の実行を要求している。

31) [話し手A: 女 → 聞き手B: 男]

A: ti: ʔut̪cukuru: so:ti 'jumuduiguʔcinu	手を ポケットに 入れて 口角が
takk̪wi:ruka na: 'juntaku ci:miso:t̪ci.	ただれる程 おしゃべり しなさって。
ʔmma <u>dukinamiso:re:</u> .	そこ <u>おどきなさい</u> 。
B: ʔaja:ja t̪ci:so:nu ʔarasanu...	お前は 気が 荒すぎる。《実践：38-39》

次の用例では、お店の売り手が道行く人に商品を買うように促している。そのような時、ci:miso:re:形式を用いている。不特定多数のひとに呼びかける場合は、このように敬語を用いるのがふつうである。

32) [お店の人が道行く人に声をかける]

'jassaibi:ndo: <u>ko:miso:re:</u> .	安いですよ。 <u>お買いになれ</u> ¹⁷ 。《入門：44》
-------------------------------------	---

2.5.2 ci:miso:rijo:形式の〈命令〉とci:miso:ri形式

ci:jo:形式がmice:nを伴っている場合も、聞き手が話し手よりも目上か、社会的地位の高いものに対して用いられていた。ただし、-ibi:n/-abi:nを伴わず、授受補助動詞も伴わない

¹⁶ ʔumani:もʔat̪ci:も士族のものに対して使用する呼称。

¹⁷ 標準日本語では「買って下さい」または「買った買った！」くらいの意味である。

次の用例は日常会話の例だが、*cimice:biri*形式が用いられると形式ばった印象を与える。ほとんど、「いってらっしゃい」のようなあいさつ表現に近い形で用いられている。

38) [那覇に仕事で行くと言う夫Aと妻Bの会話。何時に帰ってくるのか尋ねる妻B]

- | | |
|--|--|
| A: denkinu 'ju:irie: ke:tiŋe:n. | 電気の つく頃に 帰ってくる。 |
| B: ʔance: bo:ŋza: 'i:rimun ko:ti
mence:birijo: ʔiŋciban kica:
maciso:ibi:kutu. | それでは 子供の 玩具(を) 買って
いらっしゃい。一番 汽車が
好きですから。 |
| A: ʔn:, ʔn:. | うん うん。 |
| B: ʔance: he:saru ʔuŋcini ke:ti
mence:birijo:ja:. | それでは 早い 内に
帰っていらっしゃいね。 |
| A: ʔn:, ʔn:. | うん うん。 |
| B: to: ʔance: ʔndzimize:bire:. | さあ それでは いってらっしゃいませ。 |
| A: ʔo:, ʔo: ʔance ʔndziku:. | うん うん。それじゃ 行ってくる。 |
| B: he:ku ke:ti <u>mence:biri</u> . | 早く 帰って <u>いらっしゃい</u> 。 |
| A: ʔn:. | うん。《全国：281-282》 |

2.5.5 *cimice:birijo*形式の〈命令〉

*cimice:birijo*形式の場合も、聞き手に配慮しながらの〈丁寧な要求〉あるいは〈丁寧な促し〉を表す。次の用例は、貴族の会話である。妻から夫に対して*cimice:birijo*形式が用いられていた。聞き手が貴族身分など、聞き手に対してさらに配慮が必要な場合、*-ibi:n/-abi:n*形式を伴った形式が用いられるのだろう。尚、ふたつ目の*cimice:birijo*形式の文は、終助詞*ja:*がついた用例であるが、先述した通り、〈念押し〉という意味あいが付加わっている。

39) [那覇に仕事で行くと言う夫Aと妻Bの会話。何時に帰ってくるのか尋ねる妻B]

- | | |
|---|---|
| A: na:ʔakai ʔndziku:riwaru 'jaru 'wanne:. | 那覇に 行って来ないと いけない 私は。 |
| B: ʔoto:san na:ʔakai mence:bi:n n:. | お父さん 那覇に いらっしゃるんですって？ |
| A: ʔn na: ŋe:ja dŋiʔi ʔndziku:ranto:
naranŋiga. | うん もう 今日は 必ず 行ってこないと
いけないんだが。 |
| B: ʔance: nandziguuru ke:mice:bi:ga. | それじゃあ 何時頃 お帰りですか。 |
| A: denkinu 'ju:irie: ke:tiŋe:n. | 電気の つく頃に 帰ってくる。 |
| B: ʔance: bo:ŋza: 'i:rimun ko:ti
<u>mence:birijo: ʔiŋciban kica:</u> | それでは 子供の 玩具(を) 買って
<u>いらっしゃい</u> 。一番 汽車が |

maciso:ibi:kutu.	好きですから。
A: ?n: ?n:.	うん うん。
B: ?ance: he:saru ?utʃini ke:ti	それでは 早い 内に
<u>mence:birijo:ja:.</u>	<u>帰っていらっしやいね。</u>
A: ?n: ?n:.	うん うん。《全国：280-282》

ce:形式とcijo:形式のまとめ

ce:形式とcijo:形式はどちらも〈命令〉を表すが、ce:形式は常に押しつけがましさをとめない、cijo:形式は聞き手に配慮したい方となる。〈命令〉のうち〈要求〉を表す文は、圧倒的にce:の文が多い。又吉（1997）を例にとると、主文に命令形式をもつ文53例のうち、〈要求〉を表すce:の文は、17例（全体の約32%）であった。これに〈勧め・許可・依頼〉の文を含めると、実に39例（約74%）をce:の文が占めていた。cijo:の文は〈要求〉の文が5例（約9%）で、〈勧め〉の文を入れてもわずか7例（約13%）しかなかったが、出来事の事前に指示を出したり、助言や忠告したりする場面が多ければ、cijo:形式の使用例は増えるだろう（尚、ku:waの例は全てce:形式に含めている）。表1を再掲する²¹。

表1 ce:形式とcijo:形式の〈命令〉のモダリティ

強制	利益性	〈命令〉としての機能	形式	付加された機能	形式
強 ↑ 話し手利益あり ↓ 弱	聞き手不利益あり	〈強制〉	ce:, ci (古)	+〈罵倒〉	ci k ^w e:wa
		〈指示1〉	ce:, ci (古)	+〈同意=念押し〉	ce:ja:
	〈要求〉	〈違反矯正〉	厳しくce: やさしくcijo:	-	-
		〈指示2〉	cijo:	+〈同意=念押し〉	cijo:ja:
	聞き手不利益 ニュートラル	〈丁寧な命令・促し〉	cimiso:re: cimiso:rijo: cimice:bire: cimice:biri cimice:birijo:	-	-

命令表現にはこの他に、次に示すようにwa形式がある。主に不規則動詞の命令形に用いられる。

²¹ 尚、表1は上で述べたことをわかりやすく示すためのめやすであって、多少のずれはある。例えば、cijo:形式を語気をつよめて用いた場合、ce:形式と同じくらい強制的な意味合いが伴うこともある。

2.6 wa形式

wa形式は、主に不規則動詞 $\widehat{t}cu:n$ や k^wain などの命令形として用いられるが、規則動詞の命令形としても用いられる。 $ku:wa$ (来い)、 $k^we:wa$ (~ (し) やがれ)、 ?irabiwa (選べ)、 ?i:wa (言え) という形が見られたが、用例のほとんどが $ku:wa$ での使用だった。

動詞 $\widehat{t}cu:n$ は変則的な活用をするため、命令形が $ku:$ となり、 $ce:$ や $ci:$ のかたちを取らない(あるいは語尾が $-e:$ や $-i:$ を取らない)。 $ku:$ という形は、他の動詞の ci 形式に相当すると考えられ、wa形式である $ku:wa$ という形は、他の動詞の $ce:$ 形式に相当すると考えられる²²。なぜなら、 $ku:wa$ は使用頻度が高く、 $ku:$ は芝居など改まった場面で用いられる傾向があるからである。

つまり、不規則動詞の場合、wa形式が $ce:$ 形式の代わりとなって、命令文で用いられやすい。また、〈強制〉のような意味あいから〈勧め〉に近い意味あいを表すwaの文もあるため、必ずしも〈強制〉や〈要求〉といった命令の意味あいを強めたり、〈蔑み〉を表すようなものではないと思われる。ある特定の聞き手との関係の中で、文を伝えるという終助詞のはたらきを担っているのだとすれば、「上から物を言う」という話し手の態度があらわれているのかもしれない。「上から物を言う」という話し手の態度がそのまま〈蔑み〉のようなネガティブな意味あいに繋がるわけではないが、そのようなニュアンスがあるために、時々あるいはしばしば、〈蔑み〉や〈罵倒〉、〈強制〉といった意味あいと共起するのだろう²³。

強制力の強い〈要求〉

- | | |
|---|----------------------------|
| 40) $ha:e:nati$?ndziku:wa . ?awatirijo: . | 走って <u>行って来い</u> 。急げよ。《猿》 |
| 41) A: 'jasa . ?arandi ?umuira:
'ja:kai ?ike: . | そうだ。そうじゃないと 思うなら
家に 行け。 |
| B: $ci:kono:$ $\widehat{t}ca:$ $naibi:gaja:$. | 試験は どう なりますかね？ |
| A: $na:$ $\widehat{t}cu:ke:n$ $ku:wa$. ?atcajasa . | もう 一回 <u>来い</u> 。明日の朝。 |
| B: $nu:ga$ $nu:ntcisai$. | どうしてですか？《実践：46》 |

²² $ku:$ という形はまた、意志・勧誘形と同音なため、終助詞 $ja:$ が後接する場合は、命令形ではなく、意志・勧誘形としての使用である(命令の ci 形式と $ja:$ は共起しない)。

²³ 「かなり待遇度が低く、話し手と聞き手との間に年齢差がある場合や聞き手が目下である場合に用いられる」(仲原2014: p.139)。しかし、この説明は、 $ce:$ 形式にもあてはまるし、また、 $ku:wa$ の場合はほとんど $ce:$ 形式に近い意味あいをもって普通に用いられる。やはり、現代首里方言では $ce:$ という形式の無さを $ku:wa$ が埋めているのだと考える。また、「テーワ ($te:wa$)、おあがり。お食べ。老女が目下に「食べよ」という意をやや丁寧という語。普通の人は $kame:$ (食べろ) という」(首里那覇音声データベース「テーワ」という記述もそのことを教えてくれる。ただし、詳細はさらなる調査が必要である。

- 42) A: t̄ɕu:ja d̄zukuɛn^lo:ja t̄ɕa: naibi:ga. 今日は 受験料は どう なりますか。
 B: t̄ɕa:n naransa. t̄ɕuke:n ʔndzæ: kara: どうも ならないよ。一回 出したら
 hikkumiransa. ʔat̄ɕan mata mutt̄ɕi 戻らないよ。明日も また 持って
 ku:wa. 来い。《実践：46》
- 43) 'o:nu ʔi:t̄ɕike: 'jakutu ku:ndi ʔi:wa. 王の 言付け だから 来いと 言え。
 《那民：59》
- 44) ʔuwairumadi mat̄t̄ɕo:kiwa. 終わるまで 待っておけ。《沖会：99》

〈指示〉など

- 45) to: 'nna ɸe:ku kumaŋkai ku:wa. さあ みんな 早く ここに 来い。
 mi:nu kensa had̄zimi:ndo. 目の 検査 始めるぞ。《実践：48》
- 46) ɸu:saru muŋkara ʔirabiwa. 欲しい ものから 選べ。《大沖：82》

動詞の連用形（第一中止形）に、k^we:waが後接した命令文は、〈罵倒〉という話し手のマイナスの評価的な意味あいが付加わる。しかし、これも動詞k^wainのもつ語彙的な意味がそのような意味あいの付け加えを実現していて、waだけが実現しているわけではない。

- 47) A: ʔja: t̄ɕira: 'n:d̄zibuɕiko: ne:n. nama お前(の) 顔は 見たく ない。今
 ɕigu ʔndziti ʔit̄ɕi k^we:wa. すぐ 出て 行き やがれ。
 B: ʔu: ʔndziti ʔit̄ɕabi:sa. はい。出て 行きますよ。《調査》
- 48) ɕini k^we:wa. 死に やがれ。《調査》

3. 〈勧め〉

3.1 ɸe:形式の〈勧め〉

〈勧め〉の文は、聞き手に利益のあることとして、話し手が聞き手にある行為の実行を勧めたり、忠告・助言したりする文である。聞き手利益のある場面や文脈で、ɸe:形式とɕijo:形式のどちらも用いられるが、先述のように、ɸe:形式は伝えるニュアンスとして押しつけがましさを伴う。

- 49) ʔja:ja ɸuruɕiburu. na:ɸin bint̄ɕo:ɕe:. お前は 古頭²⁴。もっと 勉強しろ。
 《実践：14》

²⁴ ɸuru 古、t̄ɕiburu 頭。直訳。「時代遅れである」という意。

B: 'wanne: ʔikusa: cikammun. 私は 戦は 好きじゃないもの。
 A: ʔikusa ciŋcūru tŋcunu 'uibi:mi. munnu 戦 好きな 人が いますか。物の
 tatuidu 'jaibi:ru. ʔusagamiso:re:. 例え ですよ。召し上がれ。
 B: 'i:i. cimusa. いや。結構。《実践：47-48》

3.3 cijo:形式の〈勧め〉

cijo:形式の〈勧め〉の文は、ce:形式に比べて押しつけがましさが無い。聞き手のことをおもんばかりのような、聞き手に配慮した〈勧め〉の文となっている。

57) A: kʷattŋi:cŋi ʔndzītca:biratai. ごちそうになって (もう) 行きます。
 B: ke:imi 'jo:nna: ʔikijo:. 帰るのか。ゆっくり 行けよ。
 A: ʔu:. はい。
 B: ʔmma: mitŋcin 'wassagutuja:. そこは 道も 悪いから。
 A: ʔu: はい。
 B: ʔanu: 'jo:nna: tu:rijo:. あの ゆっくり 通れよ。
 A: ʔu:. niŋe:de:birutai. はい。ありがとうございます。
 ʔance: ʔitŋcabirai:tai. それでは 行きますね。《全国：306-307》

cijo:の勧めの文のうち、文脈や場面設定に加えて、〈忠告・注意〉や〈励まし〉という意味合いが語彙的に固定されたものがある。例えば、次の用例でみる「注意しろ・気をつけろ」や「頑張れ」などがある (村上1993:82)。

58) [日が暮れてから外出する男Bに対して、女Aが提灯を持っていくよう勧める]
 A: habunde:nu 'uine: narammun ハブなどが いたら いけないから
 tŋo:tŋcin tŋikiti ʔike:. 提灯(を) つけて 行け。
 B: 'ikiganutŋa:ga ʔunu'ate: nu:n ʔaibiran. 男達が その位は 何でも ありません。
 A: ʔuka:ciko:ne:ni. tŋe:i ci:jo:. 危なくはないかね。注意 してね。
 B: ʔu: ʔu:. na: ʔitŋcabira. はいはい。もう 行きますね。《全国：277》

59) A: 'wanne: tutŋci: mutŋce: 'uibiranciga 私は 時計(を) 持って いませんが
 tŋa: ce: 'jutasai:bi:ga. どう すれば よろしいですか。
 B: ʔa: ʔure:jo: makate:. 'wanŋa to:ndi ああ それはね マカテー。私が トー²⁷と

²⁷ 「トー」は、何かを始めるときや終わるときの表現・合図である。感動詞。

ʔisa. t̃ca:n ne:nsa. t̃cibarijo:.

言うよ。どうってことないよ。頑張れよ。

《実践：46-47》

3.4 eimiso:rijo:形式の〈勧め〉

eiso:rijo:形式の〈勧め〉の文も、聞き手が年上だったり、社会的上位にある立場の者に向かって、聞き手を配慮しながら勧めるようなときに、用いられていた。

60) [年上の知り合いの中年男Aと若い青年Bの会話]

A: to: ʔance: ʔisud̃zi ʔike:. ʔit̃citumiti さあ では 急いで 行け。引きとめて
guburi: nato:sa. ʔippe: niʔe:do:. ʔja:ga ごめんよ。本当に ありがとう。お前が
ʔi:rugutu ge:tobo:runde: ce: ʔn:d̃zusa. 言うように ゲートボールでも して みるよ。
B: ʔancimiso:rijo:. ʔance: ʔnd̃zi t̃ca:bira. そうなさいませ。それじゃあ 失礼します。

《実践：14》

61) [道端での会話。あいさつのように用いる]

ʔumit̃ce: tatta t̃cu:kuru naibi:kutu 熱気は しだいに 強く なりますから
ʔo:d̃zin eimiso:rijo:. 用心 しなさいませ。《調査》

62) [雨が降った後で]

kuma: nandurusakutu ʔo:nna: ここは 滑るから ゆっくり
ʔat̃cimiso:rijo:. お歩きなさいませ。《調査》

調査協力者によれば、聞き手が年上であったり、社会的な立場が上位であったりすることは、敬語表現を用いるおおきな理由になるが、実際の会話では、より複雑で、年下および対等の者や親しい者に対しても、上の二例のように敬語を用いることもあるという。例えば、知らない人やそれほど親しくない相手との会話の場合や、親しくてもまだ少し距離があり敬語を用いる関係であったりする場合などである。

4. 〈許可〉

〈許可〉の文は、話し手の関与（意向や希望の有無）という観点から、聞き手の行為の実行を許可したり、承認したりする機能をもつ（高木2009：109，村上1993：78）。つまり、さきに聞き手側（動作主体）から行為の実行についての意志が示されていて、それに対して命令文という形で返答することで〈許可・承認〉という意味あいを付け加えている。eijo:形式やeimiso:rijo:形式の使用例は見つからず、ce:形式が用いられやすい。尚、聞き手

B: ʔance: cikennu ʔuwati 'wanɡa kumakara ʔndziti ʔike: no:isa.	それじゃあ 試験が 終わって 俺が ここから 出て 行けば 治るさ。
A: ʔaibi:gaja:.	そうですかねえ。
B: ʔasa. ʔarandi ʔumaira: ʔa:kai ʔike:.	そう。じゃないと 思うなら 家に 行け。
A: cikeno: tca: naibi:gaja:.	試験は どう なりますかねえ。《実践：46》

4.2 ʔimiso:re:形式の〈許可－依頼〉

次の用例は、お年寄りの患者と看護師の会話である。看護師が自分よりも目上のお年寄りの患者に対して、ʔimiso:re:形式を伴った行為要求文を用いている。しかし、ここで「熱を測らせる」あるいは「熱を測るのを許可する」のは話し手ではなく、聞き手である。niŋci hakarasun（熱を測らせる）やna:ku turasun（脈をとらせる）などの使役表現が用いられることで、話し手がこれから行う動作の〈許可〉を聞き手に〈依頼〉するという意味あいに変化する。全く別の文に変わるというわけではなく、〈許可〉という意味あいを土台に使役という文法的な手続きを経て、〈依頼〉という意味あいが実現される。そして、〈許可－依頼〉の文では、聞き手の意志がさきを示されてなくてもよい（用例では聞き手がお年寄りのためʔimiso:re:形式が用いられているが、ʔimiso:re:形式に限らない）。

67) [話し手A: 看護師 → 聞き手B: お年寄り (患者)]

A: tciburunu ʔiŋig ^w a: ʔamussa:.	頭が 少し 痛むよ。
B: ʔance: niŋci hakaraʔimiso:re: (熱を測る)	それでは 熱(を) 測らせてください ²⁹ 。
niŋce: ʔansuka: ʔaraŋkutu na:ku turaʔimiso:re:.	熱は それ程でも ないので 脈(を) とらせてください ²³ 。《暮らし：86》

4.3 ʔimice:bire:形式の〈許可〉

次の用例では、家を訪ねてきた伯父に対して、門の近くにいた姪が家に入るよう〈許可〉している。伯父は親雲上^{ベーチン}身分のため、特別に丁寧な言葉遣いが必要なのであろう、ʔimice:bire:形式が用いられている。

68) [伯父 (池城親雲上^{イチグシクベーチン}) が怒りをあらわにしてあらわれる。マカトゥーはBの母親 (会話ではCのこと)]

²⁹ 「ください」という訳をあてているが、意識であり、依頼文ではない。直訳すると、それぞれ「測らせなされ」「とらせなされ」である。

A: kuma ʔitta: makatu:ja 'urani.	おい お前達(の) マカトゥーは いないか。
B: tame:tai ʔimice:bire:.	伯父様 <u>お入りください。</u>
C: ʔuntɕu:tai mence:bi:ti:.	伯父様 いらっしゃったのですか。

《芝居：554》

次の用例も、行為の実行がさきに聞き手から示されているため〈許可〉の文である。次の用例をみるとやはりce:形式が〈許可〉の文で用いられやすいことを示している。要求文のときには、cimice:birijo:形式が用いられているのと対照的だからである（波線部）。

69) [那覇に仕事で行くと言う夫Aと妻Bの会話。何時に帰ってくるのか尋ねる妻B]

A: denkinu 'ju:irie: ke:titɕu:n.	電気の つく頃に 帰ってくる。
B: ʔance: bo:dza: 'i:rimun ko:ti mence:birijo:. ʔitɕiban kica: maciso:ibi:kutu.	それでは 子供の 玩具(を) <u>買って</u> <u>いらっしゃい。</u> 一番 汽車が 好きですから。
A: ʔn:, ʔn:.	うん うん。
B: ʔance: he:saru ʔutɕini ke:ti mence:birijo:ja:.	それでは <u>早い 内に 帰って</u> <u>いらっしゃいね。</u>
A: ʔn:, ʔn:.	うん うん。
B: to: ʔance: ʔndzimice:bire:.	さあ それでは <u>いってらっしゃいませ。</u>
A: ʔo:, ʔo: ʔance ʔndziku:.	うん うん。それじゃ 行ってくる。

《全国：281》

4.4 cimice:biri形式の〈許可〉

cimice:biri形式の〈許可〉の文が一例だけみつかった。したがって、cijo:形式や cimiso:rijo:形式の〈許可〉の文も理論上ありえると思われるため、用例の収集は今後の課題である。

70) [話し手A: 王様の臣下 → 聞き手B: お姫様]

A: ta: 'jaibi:ga.	誰 ですか!?(怒った調子で)
B: niraikanainu kunikara gudzira'o:samanu ʔumime: ci:ga 'ju:irijabitan.	ニライカナイの 国から グジラ王様の お見舞い(を) しに 参りました。
A: kure: na: guburi: naibiti cidigaɸu:na kutu de:biru. ʔimice:biri.	これは もう 失礼 しまして ありがたい 事で ございます。 <u>お入りなさいませ。</u>

tumiti k^wimiso:ri.

止めて 下さい！《大沖：86》

74) [テレビで競馬中継を見ていて]

ʔike:. ʔike:.

行け！ 行け！

7. 〈非難〉

〈非難〉という用語や定義は高木（2009）から引用したものである。〈非難〉は、出来事が終わって後、つまり、命令の実行がすでに不可能な場面で、命令表現を用いて聞き手に対して注意したり、非難したりすることを指す³¹。「行為が行われなかったことに対する話し手のマイナス評価（非難）」を表しているため、機能的にはもはや命令文というよりも評価文と言った方がよい。こちらでも諭すように言う場合は*ei*jo:形式を用い、話し手が怒っていたり、きつめに注意する場合は*ce*:形式を用いる。

75) [公演中に私語をしていたが、その場では注意できなかったので、公演後に呼び出す]

tʃunu hanaci suruba:ne: 'ju: tʃikijjo: 人が 話(を) する時は よく 聞けよ↓

76) tʃunu hanaci suruba:ne: 'ju: tʃike: 人が 話(を) する時は よく 聞け。

《調査》

8. *ce*:ja:, *ei*jo:ja:の文のモダリティ

ce:ja:や*ei*jo:ja:の文は用例が少なく、ja:の文の分析も不十分なため、全体的に分析が貧弱ではあるが、批判を恐れずに言うならば、終助詞ja:には、聞き手に同意あるいは承諾を求めるというはたらきがあり（崎原2016）、話し手が提示した命令行為に対して聞き手の同意や承諾を求めるような意味あいを付け加える（仮にこの意味あいを〈同意〉と呼ぶ）。同時に、話し手は聞き手が当然〈同意〉するだろうという態度で文を述べるため、結果として、〈念押し〉という意味あいを表す。ただし、次にみるように*ce*:ja:と*ei*jo:の表す〈念押し〉は若干異なる。

ce:ja:形式を伴う命令文が用いられる背景として、一度、聞き手に話し手の望みが伝えられているという文脈が必要である。それにも関わらず、話し手が行為の実行を渋ったり、迷ったりしているため、話し手は行為の実行をもう一度〈念押し〉し、聞き手に同意を得てもらおうというような意図が、下記の用例から感じられる。

次の*ce*:の文のモダリティは〈命令〉である。〈命令〉にja:の意味あいが付け加わること

³¹ 「違反矯正の機会をすでに逃してしまっているのにもかかわらず、命令表現が用いられることがある。もはや違反を矯正しようのない段階におけるこのような表現は、行為が行われなかったことに対する話し手のマイナス評価（非難）を表す」（高木2009：110）。

によって、その命令行為の同意・承諾を聞き手に求める文となり、結果として、動作の実行を〈念押し〉する。

77) [首里には行かないとダダをこねる孫に対して祖母が]

suĩŋkai ʔiŋci:ne: ʔja:garu rakun sundo:	首里に 行けば お前が 楽も するんだよ。
ʔane, mainu ʔubunun ŋuɸa:ra kari,	ほら、白の ご飯も 腹一杯 食べて、
ŋurasaru ʔiɸo:n ʔuŋikasabi kasabi	綺麗な 衣装も 沢山 重ねて
ʔja:garu ŋci:ndo: ʔjagutu ta:ri:tu	お前が 着るんだよ。だから、父上と
madʒun suikai ʔike:ja:.	一緒に 首里に <u>行きなさい</u> ね。《芝居：590》

次のce:の文のモダリティは、4.2 「cimiso:re:形式の〈許可－依頼〉」で紹介した使役表現を含んだ〈許可〉の文である。一度依頼した内容について、再度、聞き手の同意を得ようと〈念押し〉している。

78) [男の子が生まれたら連れにくるという約束だったので]

A: ŋcu: kançi mi:tunda ŋcaçiru	今日 こうして 夫婦で 来たのは
ʔmmaritaru ʔwarabinu ʔikigang ^w anʔi	生れた 子どもが 男の子だと
ʔiŋci ŋciŋagutu so:iga ŋcan.	言って 聞いたので 連れに 来た。
biru:, <u>so:raŋci turace:ja:.</u>	ビルー、 <u>連れさせてくれよ</u> な。
B: tari, satunuçi. kunu ʔwarabe:	あの、旦那様。この 子どもは
namamadi du:i do:rin ʔwanni	今まで 通り どうか 私に
sudatiraçimiti k ^w imiso:ri.	育てさせてください。《芝居：586》

一方、çijo:ja:形式を伴う命令文は、事前に行為の実行を〈念押し〉する文となる。つまり、話し手が聞き手に望む動作を事前に伝え、同意・承諾を得るかたちで、動作の実行を〈念押し〉する。禁止命令文なら、その行為をしないように同意・承諾を得ながら〈念押し〉する。

79) sari ʔwaka:dʒinume: ʔwanğa kunu ɸino:	さあ 若按司様 私が この 辺の
banti so:ŋcabi:gutu nu:n ŋciçake:ja	番人(を) しておきますので 何も 心配は
çimiso:raŋgutu ʔju:ju:tu hanaçimunugatai	なさらずに ゆっくりと お話
çimice:biri. to: ŋçiru: ʔumukuto: ʔin[ɸo:	なさいませ。さあ チルー 思う事 遠慮
saŋgutu ʔunnukirijo:ja:.	しないで <u>申し上げるんだぞ</u> 。《芝居：620》

表2 ce:, ci, cij:, wa形式のモダリティの諸相

強制	利益性		機能	形式	付加された機能	形式	
強 ↑ ↓ 弱	話し手利益あり	聞き手不利益	〈強制〉	ce:, ci (古), wa	+〈罵倒〉	ci k ^w e:wa	
		聞き手利益 ニュートラル	〈指示1〉	ce:, ci (古), wa	+〈同意=念押し〉	ce:ja:	
			〈要求〉	〈違反矯正〉	厳しく ce: やさしく cij:	—	—
				〈指示2〉	cij:	+〈同意=念押し〉	cij:ja:
			〈丁寧な要求・促し〉	cimiso:re: cimiso:rijo: cimice:bire: cimice:biri cimice:birijo:	—	—	
			〈招待〉	cij:	—	—	
—	話し手・聞き手利益あり		〈勧誘〉	ce: ³²	—	—	
	話し手利益 ニュートラル	聞き手利益あり	〈勧め〉	ce: cimiso:re: cij: cimiso:rijo: (cimice:bire:) (cimice:birijo:)	—	—	
				〈許可〉	主に ce: cimiso:re: cimice:bire:	—	—
	(出来事終了後)		〈非難〉	厳しく ce: やさしく cij:	—	—	

【用例の典拠】

《方談》 国立国語研究所編 (1985) 『方言談話資料(8)－老年層と若年層との会話－』

《方談10》 国立国語研究所編 (1987) 『方言談話資料(10)－場面設定の対話その2－』 国立国語研究所資料集10-10

³² 勧誘の文は用例が一例しかなく、cij:形式等も用いられる可能性がある。その詳細については今後の課題である。

- 《大沖》 「大好き沖縄」編集部編 (2006)『大好き沖縄』第33号
- 《猿》 玉那覇朝子訳『猿の生肝』(芝居脚本)
- 《沖会》 中松竹雄 (2000)『沖縄語会話』沖縄言語文化研究所
- 《那民》 那覇市教育委員会 (1982)『那覇の民話資料』第4集 (首里地区)
- 《芝居》 那覇市教育委員会・沖縄言語研究センター (1994)『沖縄芝居脚本集第2巻：那覇の方言—那覇市方言記録保存調査報告書IV』
- 《入門》 西岡敏・仲原穰 (2000)『沖縄語の入門—たのしいウチナーグチー』白水社
- 《全国》 日本放送協会編 (1972)『全国方言資料』第10巻 琉球編I, 日本放送出版協会
- 《実践》 又吉元亮 (1997)『実践首里語テキスト』純スイ会
- 《暮らし》 宮里朝光・小那覇全人・崎濱秀平・宮良信詳 (2006)『沖縄ぬ暮らしとう昔話』
沖縄語普及協議会
- 《調査》 面接調査・80代男性, 首里平良町出身

【参考／引用文献】

- かりまたしげひさ (2016)「沖縄名護市幸喜方言の終助詞とモダリティ」『琉球アジア文化論集』第2号 (別冊)。
- 酒井雅史 (2012)「兵庫神戸市方言における命令表現」『阪大社会言語学研究ノート第10号』大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, 18-29。
- 崎原正志 (2015)『首里方言の終助詞do、jo、te、ja。』(修士論文)。
- 崎原正志 (2016)「沖縄首里方言の確認要求文—raja:, ce:ja:, ce:の文を対象として—」(未発表論文)。
- 首里那覇方言音声データベース (<http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/srnh/index.html>)。
- 高木千恵 (2009)「命令表現」『方言文法調査ガイドブック3』国立国語研究所全国方言調査委員会編。
- 仲原穰 (2014)「要地方言の活用体系記述 沖縄県那覇市首里方言」『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』方言文法研究会編, 2009-2013年度 科学研究費補助金 基盤研究 (B)「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号: 21320086・研究代表者: 日高水穂) 研究成果報告書, pp.135-145 (Retrieved from: http://hougen.sakura.ne.jp/shuppan/2014/16_135.pdf)。
- 那覇市企画部市史編集室編 (1979)『那覇市史資料編』第2巻中の7 (那覇の民俗), 那覇。
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版, 東京。
- 村上三寿 (1993)「命令文—しろ, しなさい—」『ことばの科学6』pp. 67-115, むぎ書房, 東京。